

N I E ー 図書館からの取り組み

指定校 2 年次 長野県下諏訪向陽高等学校 学校司書 松井 正英

1 N I E 実践のねらい

新聞を毎日読むという習慣がある高校生は、実際のところそれほど多くない。けれども、進学や就職の場面では、社会のできごとに対してどのような関心を持っているかが問われ、日頃から新聞を読んでいることが必要である。今年度、学校図書館として N I E に取り組むことになり、こうした状況に対して図書館という立場から次のようなねらいを設定した。

- ・新聞をより身近なものに感じる。
- ・新聞の活用を通して、社会のできごとに対する関心を高くする。
- ・新聞の特徴を知り、情報源としての的確に活用できる力を身につける。

2 図書館としてできること

教育における学校図書館の役割には、大きく分けて次の 3 つがあると考えている。

1 つめは、子どもたちが学習活動や日常生活の中で必要としている、あるいは求めている資料や情報を幅広く、確実に提供することである。2 つめは、子どもたちが図書館で資料や情報を手にする経験を重ねることで、求めている資料や情報は手に入れられると知ってもらうことである。このことは学習の場面ではもちろん、大人になってからも、何か疑問を抱いたときに調べてみようという意欲に結びつく。ところで、こうした資料や情報は図書館に行けば司書が探してくれるが、それでも自分で探す力を身につけることが必要だ。それゆえ、役割の 3 つめは、子どもたちが資料や情報を探し、活用する力を身につけるサポートをすることである。

それでは、N I E の実践で学校図書館ができることは何か。上述のような役割を踏まえながら、私は現時点で次の 5 つを考えている。

- ① 新聞に日常的に接することができる環境を整備すること。
- ② 生徒が求めている情報を提供すること。
- ③ 生徒の興味・関心を喚起すること。
- ④ 生徒が新聞を読むリテラシーを身につけるサポートをすること。
- ⑤ 新聞の活用を通して担当教諭と一っしょに授業を作っていくこと。

3 実践の概要

ここでは、上記 5 つの観点に沿って本校の実践の概要を紹介する。

3.1 新聞の環境整備

本校図書館では、新聞は「読売新聞」「朝日新聞」「信濃毎日新聞」「長野日報」の 4 紙を購入している。このほかに『朝日新聞縮刷版』とニホンミツクの切抜き速報「科学と環境版」「保育と幼児教育版」「食と生活版」を購入している。保存年限は地元紙の「信濃毎日」と「長野日報」が 2 年間、「読売」が 1 年間、縮刷版がある「朝日」は半年間で、縮刷版は 20 年間となっている。また、切抜き速報は 5 年間保存している。なお、『朝日新聞縮刷版』については、諏訪地区

の県立高校9校で分担保存をしており、戦後以降のものは相互貸借によっていつでも利用可能になっている。

3.2 新聞による情報提供

生徒の新聞利用は、残念ながら日常的にはそれほど多くない。話を聞いていると、家でもそれほど読んでいるわけではないようだ。ただ、部活動の試合や発表の翌日に関連記事を見に来るし、推薦入試を控えた3年生がコラムや社説などを読みに来る。

入試対策では、志望している分野の記事を日頃からチェックしておくことが大切だが、図書館のガイダンスで呼びかけてもなかなか実行してもらえないのが実情である。それで、切羽詰まってようやく図書館で記事を探しはじめることになる。生徒には最近の新聞をひっくり返して見てもらうほかに、いっしょに『朝日新聞縮刷版』で調べたりしている。また、職員向けに県が一括して「信濃毎日」のオンライン・データベースを契約しているので、記事を探すのに活用している。

3.3 興味・関心の喚起

興味・関心の喚起としては、新聞そのものに関心を持ってもらうことと、新聞を通して社会のできごとに関心を持ってもらうことの二つがある。とはいえ、とくに区別しておこなっているわけではない。

たとえば、これはという記事があるときは、その記事のコピーといっしょに関連の資料を展示する。たとえば、「シー・シェパード」の記事にあわせて捕鯨の本を展示したり、COP10の関連で生物多様性の本を展示したり、という具合である。生徒の反応は、記事への関心度によってさまざまだが、記事といっしょに表紙を見せて並べることで、ただ書架に並んでいるよりは関心を持ってくれるようだし、その本が現実の問題とどうつながっているのかに気づく機会にもなる。

また、2学年会の希望で、進路学習の一環として、「信濃毎日」火曜日に連載されている職業案内の記事を毎週印刷して配布している。これも、そのとき紹介されている職業に関連する本の案内をあわせて載せている。

1学年では、毎月1〜2回新聞週間を設け、いろいろな新聞のコラムを読んだり、書き写したり、感想や意見を書いたりした。図書館では、上記3.2の活動になるが、新聞を提供することで新聞週間のサポートをした。

3.4 新聞を読むリテラシー教育

本校では、大学進学にあたってAO入試や推薦入試を利用する生徒が多い。それで、数年前から、おもに3年生向けに小論文対策のための図書館利用ガイダンスを実施しており、その中で新聞の活用法も取り上げてきた。

そのほかに、昨年からは現在の2学年会と連携して、図書館利用ガイダンスをこれまでに各クラス6回ずつおこなった。実施したのはLHRや自習の時間で、全クラスが均等におこなわれるように学年会で調整してくれた。新聞に関しては、新聞の構成や紙面の特徴、『朝日新聞縮刷版』の使い方などを説明したり、生徒が自分の好きな記事を選んで要約したりした。縮刷版の使い方についてはパスファインダーも用意してある。NIE指定校で購入分とは別に新聞が

来るようになってからは、実際に記事を切り抜いて要約し、さらに記事からキーワードを抜き出して『現代用語の基礎知識』などで調べるといった作業もしている。最近のガイダンスでは、複数の新聞を読むことの大切さとおもしろさを感じてもらえたらと、一つのできごとについて論調が大きく違う新聞の記事を用意し、それらを読み比べたりした。

3.5 授業における担当教諭との協力

新聞を活用した授業というのは、じつはそれほど簡単なことでないと感じている。授業の展開の中で部分的に新聞を使うことはできても、新聞をメインにして授業をつくるのはむずかしい。なぜなら、新聞もまた多様な情報源の一つにすぎないからである。あるテーマについて調べるには、新聞だけでなく、本や雑誌、インターネット、場合によってはテーマに関わっている機関や人など、さまざまな情報源にあたる必要がある。それゆえ、新聞にこだわりすぎると、授業そのものの組み立てに無理が生じてしまうのだ。そんなことを授業担当者とよく話していた。

実際には、地歴・公民の授業担当者と連携することが多かった。県知事選挙の模擬投票では、現代社会や政治経済はもちろん、歴史の授業でも新聞記事を扱ってもらった。また、政治経済の単元に合わせて、複数紙の読み比べの授業もおこなった。

そのほかに、国語表現の授業では昨年度、今年度とディベートに取り組んでいるが、その事前調べに図書館を利用している。今年のテーマは「成人年齢 18 歳引き下げについて」と「レジ袋の有料化について」であった。これらは、もちろんすでに本になっているものもあるが、新聞の情報も重要になってくる。このとき役立ったのが、「信濃毎日」のデータベースだった。はじめて使ったという授業担当者が、「これは便利ですね」としきりに感心していた。予算が十分にあれば、もっと多くのデータベースを契約でき、活用の幅も広がると思われる。

4 N I E 実践の内容

この 1 年間で取り組んできた実践の中から 3 つを選んで、以下にその内容をもう少し詳しく紹介する。

4.1 模擬投票の取り組み

4.1.1 連携した教科と取り組みの概要

本校の N I E 実践でとくに特徴的な取り組みは模擬投票である。昨年度は、司書教諭が担当していた現代社会の授業で、1 学年を対象に衆議院選挙の模擬投票をおこなった。今年度も参議院選挙や長野県知事選挙が予定されていたので、2 つのうち県知事選挙で模擬投票をおこなうことにした。その理由としては、参議院選挙の日程が本校の文化祭と重なりそうだったこと、自分たちにより身近な県政について考えてほしかったことの 2 つがある。また、今回は全校での取り組みを目指し、1 年生の現代社会をベースにしなが、2、3 年生も自由に投票できるようにした。

4.1.2 模擬投票を通して生徒に期待していること

選挙権を 18 歳に引き下げようという動きがある一方で、若年層の投票率の低さが問題になっている。この参議院選挙でも、20 歳代の期日前投票立会人を募集している自治体があくつも見

られた。それで、模擬投票にあたっては、本当の選挙の雰囲気但至少でも味わってもらおうことで、まず何より選挙そのものに関心をもってもらいたいと考えた。さらに、誰に投票するかを考え、決定するプロセスを通して、社会のあり方や具体的な政策課題に関心をもち、自分たちにとってメリットがあるのかどうかについても考えてほしいと思った。そして、この擬似体験が民主主義社会の一員としての自覚へとつながっていくことを期待した。

4.1.3 模擬投票に向けての図書館の取り組み

模擬投票は、投票を体験すること自体にも意義があると考えているが、もちろんそれに向けての取り組みは欠かせない。ただ、私は学校司書であり、直接授業を担当しないので、関連する教科である地歴・公民とどう連携していくか、図書館として何ができるか、の二つが課題だった。

図書館としては、とにかく県知事選挙関係の資料や情報を整え、授業や生徒に提供していくことを考えた。まずは、県知事選挙に関する新聞記事を切り抜いてファイリングし、同時にそのコピーを現代社会担当者に渡した。ファイルのほうは閲覧室に置いたものの、残念ながらあまり利用されなかったが、現代社会の授業では記事について触れてもらった。また、これはという記事は「模擬投票だより」にして全校生徒に配布した。こちらもHRによっては担任が触れてくれていたようである。候補者が固まってきた頃には、新聞記事を読んで各候補の政策をまとめる穴埋めシートを作成し、現代社会だけでなく、2年生の世界史でも取り組んでもらった。投票直前には、各候補のマニフェストの記事を印刷して配布したが、生徒からは「親が参考になると言っていた」という声も聞かれた。

4.1.4 模擬投票の実際

本当の選挙の雰囲気を味わってもらうのに一番手っ取り早いのは、投票所を本物らしく作ることである。それで、投票箱はまさに本物を下諏訪町選挙管理委員会から2つ借りてきた。これだけでずいぶん効果がある。投票用紙も実際に使用されている、投票箱の中で自然に開く特殊な紙を使いたいところだが、そもそも予算がないので、普通のコピー用紙に体裁だけは本物のように印刷することで我慢した。また、本当の選挙にはないが、「新しい県知事に力を入れてほしいこと」という項目も加え、いくつかの選択肢から選ぶようにした。記入する机は、図書館にあるキャレルデスク（前と両横に仕切りがある個人用机）を代用し、前には候補者名を貼付した。

投票日は、告示日後のわずかな授業日である7月23日（金）と26日（月）に設定した。前述のように、1年生は現代社会の授業の中で、2、3年生は放課後に投票するようにした。また、選挙の受付は、選挙管理委員会の生徒にお願いした。

4.1.5 模擬投票の結果と考察

模擬投票の投票率は、1年生は授業で実施したので96.6%、2、3年生はそれぞれ26.4%、22.4%で、全体では48.9%だった。もう少し投票してほしいというのが本音だが、任意投票で4分の1が参加してくれたと自分に言い聞かせている。

開票作業は、実際の投票が終わらないとできないので、結局夏休み明けの8月31日に、同じく選挙管理委員会の生徒の協力を得ておこなった。結果は、松本氏がトップで、阿部氏、腰原

氏と続いた。新しい県知事に力を入れてほしいこととしては、「教育」「高齢者福祉や医療」「財政立て直し」「産業の振興と雇用」の順で希望が多かった。

今回の県知事選挙は争点があまりはつきりせず、具体的な政策課題への関心という点ではむしろかしかった。けれども、投票をした生徒の感想からは、候補者のマニフェストを参考にしながら、在宅介護で苦勞している母親の姿や将来の自分の子育て、自分たちに直接かかわる教育など、身近な問題に引き寄せて候補者を選んでいる様子がうかがえた。松本氏が実際の結果とは反対にトップになったこと背景には、「教育」に力を入れてほしいという生徒の期待があったことが推測される。また、阿部氏、腰原氏は政党などの組織的バックアップが松本氏よりも大きく、実際の選挙ではその要素も結果に影響したと考えられるが、生徒にとってはそれがほとんど考慮の要素とならないことも、結果にあらわれているのではないだろうか。

もう一つおもしろかったのは、新聞記者のインタビューに答えている生徒の様子だった。おそらく、インタビューされた生徒は、それに答えるためにその場でいろいろなことを考え、それをきっかけに新しい問題意識を自らの中に芽生えさせたのではないかと、傍らで聞いていて感じたのだ。こうしたやりとりが、授業や学校生活の中で日常的におこなわれることが大切だとあらためて思った。と同時に、現実社会に対しては擬似的な空間である授業に比べて、本物の記者によるインタビューという、現実そのものがもつ力についても実感させられた。

4.2 新聞記事の読み比べ

4.2.1 講座及び単元名

2年の図書館利用ガイダンス及び3年選択政治・経済「国際社会の諸課題」で実施した。

4.2.2 新聞活用の内容とねらい

社会のできごとを知るのに新聞は欠かせない。一つのできごとを複数の新聞がどのように伝えているかを読み比べることで、新聞によって受ける印象が違うことを感じ、できごとの真実に近づくためには複数の新聞記事を読み解く必要があることを学んでほしいと考えた。さらに、社会のできごとが新聞記事となって読者に伝わるまでには、国家等による言論統制、新聞社の自主規制、記者の見方や伝え方、紙面の編集方針、広告を出す企業の思惑、読者の読み方やとらえ方など、さまざまなフィルターを通過してくることに気づいてほしかった。

また、新聞は「現在」起こっていることを知るだけでなく、「過去」に起こったことが当時どのように捉えられ、伝えられたかを知るのにも有効な資料である。政治・経済の授業では、まず過去の新聞記事を探す方法について、信濃毎日新聞のデータベースを活用して学ぶこともねらいとした。

4.2.3 今回取り上げる題材

今回は、2010年9月に尖閣諸島沖で起きた中国漁船衝突事件を端に発した日中関係を題材に取り上げた。この問題は、その後も中国政府と日本政府の対応や船長の逮捕・送検・釈放、中国におけるデモの様子、映像の流出など報道が続き、生徒もある程度関心を持っていると考えたからである。さらに、新聞社によって中国についての考え方や民主党政府に対する立場が違うことから、記事の書き方にも違いがみられ、読み比べやすいと考えた。

4.2.4 2学年の図書館利用ガイダンスでの取り組み

◇中国の反日デモの記事を読み比べる。

(産経、信毎の2紙の2010.10.20付の記事)

- ・生徒にはわからないようにクラスを半分に分け、一方に「産経」の記事、もう一方に「信毎」の記事を配布する。
- ・中国政府のデモに対する姿勢をどう感じたか(選択肢)、デモの様子についてどう感じたか(選択肢)、またそう感じたのは記事のどの部分からか、その記事を読んで中国に対するイメージがどう変わったか(選択肢)について、ワークシートに記入する。その後、選択肢の回答を挙手で示してもらうとともに、何人かにその理由を答えてもらう。
- ・半分に「産経」、残りの半分に「信毎」を配っていたことを明かし、今度はそれぞれもう一方の記事を配布して同じ設問に答えてもらう。

◇新聞記事を読み比べてみた感想を書く。

4.2.5 政治・経済の授業での取り組み

第1時限 新聞・雑誌記事の探し方

◇尖閣諸島をめぐる日中問題の基礎について学ぶ。(授業担当者)

(「朝日新聞」2010.9.22の「ニュースがわからん!」の記事を読みながら)

◇信濃毎日新聞統合データベースの使い方を学ぶ。(学校司書)

- ・データベースの基本的な使い方の説明と実習
自分の名前、担任の名前などで検索してみる。
- ・キーワードの論理演算子の説明と実習
さまざまなキーワードを組み合わせて検索してみる。

◇信毎データベースで、尖閣諸島をめぐる日中問題の特定の記事を探す。(学校司書)

- ・中国の蘭州市と宝鶏市で起きた反日デモの記事
- ・尖閣諸島沖の中国漁船衝突事件後にはじめておこなわれた日中首脳会談の社説
(以下、準備はしていたが、時間切れで扱うことができなかった。)

◇『朝日新聞縮刷版』の使い方を学ぶ。(学校司書)

◇雑誌記事の検索方法を学ぶ。(学校司書)

第2時限 中国関連報道を題材にした新聞の読み比べ

◇(導入として)出版社の新聞広告を読み比べる。(学校司書)

◇中国の蘭州市と宝鶏市で起きた反日デモの記事を読み比べる。(授業担当者)

(朝日、産経、信毎、読売の4紙の2010.10.25付の記事)

- ・各紙の見出しを書き出すとともに、掲載された面や写真の有無もチェックする。
- ・各紙が伝えているデモのスローガンを書き出す。
- ・それらスローガンについて各紙の共通点と相違点を考え、発表する。
- ・スローガン以外でデモの様子がわかる部分に線を引き、つづいて、各紙の記事から感じられるデモの反日感情度を☆の数で表現する。
- ・☆の数についてグループで話し合い、グループとしての意見をまとめ、発表する。

(次の社説については授業の進行状況を見ながらと考えていたが、結局時間がなくて扱うこと

ができなかった。)

◇尖閣諸島沖の中国漁船衝突事件後にはじめておこなわれた日中首脳会談の社説を読み比べる。
(授業担当者)

(朝日、産経、信毎、読売の4紙の2010.10.6付の社説)

- ・各紙の見出しを書き出す。
- ・各紙の社説が日本の対応をどのように評価しているかを考え、評価の度合いによって新聞を並べる。
- ・並び順についてグループで話し合い、グループとしての意見をまとめ、発表する。

◇新聞記事を読み比べてみた感想を書き、発表する。(授業担当者)

4.2.6 生徒の感想から

政治・経済と図書館利用ガイダンスのいずれでも、「新聞によって書き方が違う」「新聞によってできごとの印象や伝わり方が違って来る」といった感想が多数見られた。興味深かったのは、政治・経済の授業では、そのほかに写真・図の有無や見出しの違いによって記事の印象が大きく変わることを感じた生徒が多かったことである。それに対して、図書館利用ガイダンスでは、2つの新聞の違いがより印象に残った生徒が多かったようだ。

新聞によってできごとの伝わり方が違って来ることを生徒に感じてもらおうと取り組んだが、授業の組み立て方の違いで生徒への伝わり方が違って来ることを、私自身があらためて思い知らされた。情報リテラシーの授業をしながら、自分自身も情報リテラシーについて学んだという感じである。

4.3 1学年による新聞週間

4.3.1 新聞週間の位置づけとねらい

学年の指導目標にある「小論文力の育成」を目指した実践で、次のような方法で取り組む。

- ① 3年間で段階的に小論文の力を身につけさせる。
- ② 新聞や書物を読む習慣を身につけさせる。
- ③ 小論文に必要な社会的常識や知識の取得に努めさせる。

朝の時間(9:40~9:50)を使って2週に1度のペースで12週(およそ48日)実施した。

4.3.2 取り組みの内容

◇コラムを読む(4~7月)

- ・「朝日」の「天声人語」、「読売」の「編集手帳」、「毎日」の「余録」、「信毎」の「斜面」、地方新聞のコラムなどをルビ付きで読む。
- ・はじめは担任が音読して、要約をし、文の構成やむずかしい語句についての説明を多少加える。慣れてきたら、生徒自身が黙読、意味調べをする。

◇コラムを書き写す(9月)

- ・原稿用紙を配布し、月・火の2日間(20分)で完成させ提出する。また、水・金の2日間(20分)で2回目のコラムを書き写す。

◇新聞記事やコラムを読み感想・意見を書く(12月)

- ・新聞記事やコラムを読み、感想・意見をタイトル付きで3行以内(100字程度)で自由に書く。担任はコメントをつけて返却する。

◇新聞記事を読んで自分の意見を論じる（1～2月）

- ・小論文の基本構造（序論・本論・結論）を理解し、新聞記事への意見を論じる。10分間小論文（ミニ小論文）である。
- ・担任は簡単な添削指導をし、返却する。

4.3.3 1年間の反省

- ・NIE実践指定校であったため、さまざまな新聞を生徒に提示できた。
- ・新聞を読む習慣をつけるというねらいは、なかなかうまくいかなかったが、多少なりとも新聞を読むことに対する興味を持たせることはできた。
- ・新聞の活字を速く読み、内容を理解して、感想意見を書かせたので、速読や要約、論述するといった力が知らず知らずにつきつつある。
- ・「新聞記事を読み、感想・意見を書く」では担任の先生方の添削指導が大変であった。
- ・「新聞記事を読んで自分の意見を論じる」ではミニ小論文（4行）を書かせたが、短く自分の意見をまとめて論じることはかなりむずかしいようであった。ただ、小論文に対する意識づけにはなったと思う。
- ・新聞週間に対しては否定的な意見が多いと思われたが、8割以上の生徒がプラスになったという回答であった。
- ・読書週間に比べ、新聞週間は生徒のテンションが下がっていた。生徒にとっては「やらされる」というイメージが強かったように思われる。
- ・生徒たちは新聞や本を読むよりも、実際に小論文を書き、添削指導してもらったほうがプラスになると感じているようである。新聞週間の添削指導も生徒が期待しているように感じた。

5 これからの課題

授業のときのワークシートを見ると、ほとんどの生徒がまじめに取り組んでいる様子が見える。とても積極的に新聞記事と向き合い、発言してくれた生徒も少なくなかった。けれども、新聞を日常的に読むというところまではいっていない。生徒が本当に新聞を身近なものとし、新聞を通して社会のできごとに関心を持つようになるには、単発的ではなく日常的な取り組みが必要だと感じている。しかも、生徒が何の関心もないところで新聞に接していても、「やらされている」という感想だけが残りがねない。生徒の知的好奇心を刺戟するという視点を、教育活動全般において持ち続けることが課題だろう。

新聞を情報源として活用する力については、とくに信濃毎日新聞社の協力をいただいて信毎データベースの実習ができたのがよかった。データベースだけでなく『朝日新聞縮刷版』や『切抜き速報』も含めて、使いこなすところには程遠いとしても、何か調べたいときにこうしたツールがあるのを知っているだけでも大きいと思う。

NIE実践指定校であったおかげで、職員の多くが普段よりも「新聞」を意識してくれたように思う。そして、この報告にあるように何人かの職員は教育活動の中で新聞を活用しようと努めてくれた。こうした試みを少しずつでも職員の間を広げていくことがいま一つの課題である。

新聞から他の資料や社会のできごとに関心がつながり広がっていく。逆に、身近なことや社会のできごとに関する興味から新聞へとつながっていく。生徒のそんな営みのお手伝いを学校図書館としてできればと考えている。